



伊藤製作所社長 伊藤 澄夫氏 東海ラジオ放送アナウンサー 源石 和輝氏 日刊工業新聞社名古屋支社編集部 山中久仁昭

JAPAN Quality Special

ジャパン・クォリティー・スペシャル 伊藤製作所

「JAPAN Quality スペシャル」は、日本のモノづくり企業の優れた技術や経営手腕などを紹介する東海ラジオ放送の特別番組。今回は三重県四日市市にある金型メーカーの伊藤製作所社長の伊藤澄夫氏に、会社のこと、海外から見た日本のこと、モノづくり企業のこれからについてを語ってもらった。司会は東海ラジオ放送の源石和輝アナウンサー、サポーターとして日刊工業新聞社名古屋支社編集部の山中久仁昭が同席した。

社員が幸せになる職場

源石 伊藤製作所は1945年の終戦直後に漁網の製造機器メーカーとして創業し、63年に自動車関連の順送り金型、67年にプレス部品の加工に取り組みはじめました。まずは創業の経緯をお聞かせください。

伊藤 創業者である父は、航空機関係の部品を作っている職人でした。その父が終戦間際に、墜落したアメリカのB29の残骸を見て、とても驚いたようです。それは飛行機の部品のほとんどが金型を使って作られていたからです。自分が手仕事で一日かけて作っているような部品を、おそらくアメリカは5分で作るだろうと。この競争に勝ち目がないと思うと同時に、いつかは金型を作りたいと考え、終戦後すぐに伊藤製作所を創業しました。それから20年ほどして、初めて金型づくりに成功したときは、嬉しさのあまり金型で製作した部品を布団の中に持ち込んだほどだったようです。

山中 現在の伊藤製作所は最新鋭設備のデパート、ショールームといていいほどに、プレス機械などの製造設備が充実しています。しかし同社の強みは設備だけでなく、人の技と最新設備のコンビネーションにあると感じています。

伊藤 製造設備の充実については96年にフィリピンに進出したことが関係しています。フィリピンの新工場に、新品の機械を導入するのはやはりリスクがあると感じました。そこで、日本である程度償却し、簿価が安くなった機械を持ち込むことにしました。やはり教育がスムーズに進



日本のモノづくりについて熱く語る伊藤社長

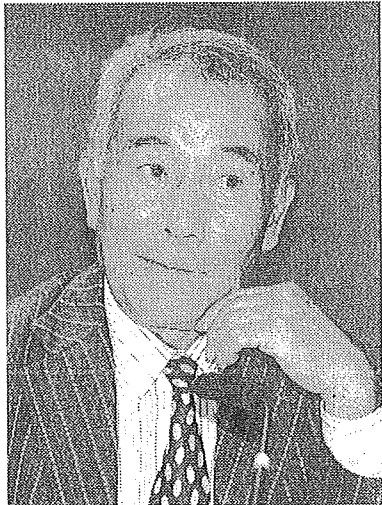
出を決めたのですか？

伊藤 金型のような業種は5年、10年と社員を教育していく必要があります。そうするとやはり日本に親しみを感ずける国であることが望ましい。最初はタイに進出したように考えていたのですが、ちょうどその頃タイの土地代が上がってきたこともあり、それなら同じく親日国であり、語学力のあるフィリピンにしようと思いましたが、やはり教育がスムーズに進

源石 海外に出ることがあったと思いませんか。日本でのやりにくさを感じることも多いと聞きます。

伊藤 日本は人材のレベルが高いことや、高品質な材料、最新の工作機械がすぐに手に入ることに、機械が故障してもすぐに修理できることなど多くの利点があります。むしろこれだけ産業インフラが整った国はないと思います。しかし問題は行政です。行政には輸出競争力が高まるようなサポートに取り組んでほしいのですが、実際は製造業にとってコストが高くつくことが多いです。税制や規制などに問題点が多く、やりにくさを感じ

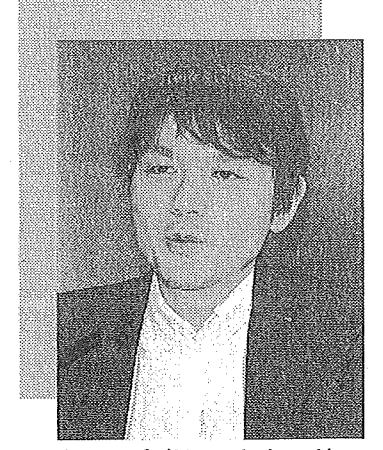
製造業は現場が主役 伊藤



伊藤 澄夫 社長

【伊藤製作所】
 順送り金型設計・製造、プレス部品加工
 代表取締役社長 伊藤 澄夫
 住所：三重県四日市市広永町101
 TEL: 059・364・7111
 FAX: 059・364・6410
 HP: http://www.itoseisakusho.co.jp/

伊藤社長自身が金型



源石 和輝 アナウンサー

源石 海外に出ることがあったと思いませんか。日本でのやりにくさを感じることも多いと聞きます。

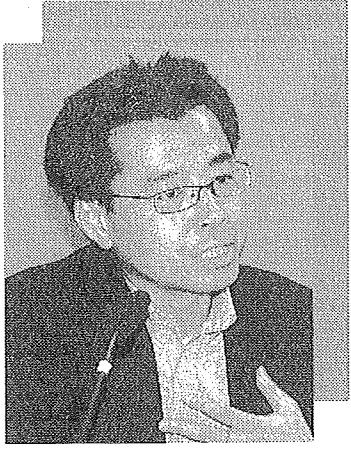
伊藤 日本は人材のレベルが高いことや、高品質な材料、最新の工作機械がすぐに手に入ることに、機械が故障してもすぐに修理できることなど多くの利点があります。むしろこれだけ産業インフラが整った国はないと思います。しかし問題は行政です。行政には輸出競争力が高まるようなサポートに取り組んでほしいのですが、実際は製造業にとってコストが高くつくことが多いです。税制や規制などに問題点が多く、やりにくさを感じ

山中 競争力の点でいうと、リーマンショック以降、日本の製造業は自信を失っていたように思います。「メイド・イン・ジャパン」は依然として競争力のある、強いブランドなのではないかと危惧しています。しかし企業の経営者は東日本大震災を乗り越え、少しずつですが「日本の製造業はまだまだやれる」という気持ちを振り戻してきています。日本はモノづくり企業はもって自信を持ってよいと思えます。とりわけコトコトツと技能を磨き、一つのモノを作り上げる金型産業は日本人に適した産業ではないでしょうか。

源石 われわれ日本人が日本のことを知らないすぎるといえるのが、自信をなくしている原因ではないかと思えます。

伊藤 そうだと思えます。例えばインドネシアは日本に対する信頼が非常に高い国です。国民の80%が日本に対して好意的な感情を持っているといわれています。また、インドネシアで走っている自動車の91%が日本車、オートバイに至っては99%です。これほど日本に良いイメージを持っているというところを日本人はあまり知らない。日本金型工業会の副会長や国際委員長として毎年訪問しますが、このことをもって伝えていきたいと思います。日本の国際的に良い評価をマスコミはしっかり報道してほしい。

源石 記者の目から



山中 久仁昭 記者

制度の改善が先決 山中

源石 伊藤製作所の今後についてですが、新しい工場を海外に作る予定があるようですね。

伊藤 先ほどお話ししましたが、インドネシアはとても日本に好意的です。すでに6社から一緒に仕事をしたいというオファーがあり、年内にも進出を実現します。中小企業が海外進出を考えた時、資金面を問題にすることが多いですが、一番の問題は海外に駐在する人材の不足だと思えます。今回インドネシアに進出する際は、フィリピンのローカル・スタッフを派遣しようと思えます。

源石 日本はもちろん、諸外国でも人材と技術を育て、伊藤社長のモノづくりの思いを多くの人に広げている。そういう意味では伊藤社長自身が「金型」であるように思えます。今日はありがとうございました。

